

青年部OB講演会 8月21日

大山会長をはじめ、OBを含む28名が参加しました。堀氏より青年部設立の経緯及び当初の苦労について1時間にわたりご講演いただきました。



▲初代会長 堀氏



▲熱心に聴く現青年部メンバー



▲謝辞を述べる小松原副会長

児島トライアスロン 8月24日

大山会長・鴨井直前会長・中西副会長・渡辺祐三理事・渡辺清二理事・平井理事・竹内秀勝氏の7名がボランティアとして参加しました。鉄人達の走りにビックリ!!

岡山県商工会議所青年部 連合会第3回正副会長会議 9月24日

岡山県商工会議所青年部連合会第3回正副会長会議が円通寺、良寛荘で開催され、渡辺県青連会長、大山会長が出席されました。

合同委員会・スピーチ研修 9月18日

大山会長をはじめ、25名が参加しました。スピーチ研修に入り西原氏、藤南氏、齊藤氏、富田氏、小野監事、大山会長、土倉氏が与えられたテーマについて3分間スピーチを行いました。参加者全員で、スピーチされた方の採点をいたしました。



▲大山会長



▲藤南氏



▲西原氏



▲富田氏



▲齊藤氏



▲合同委員会の開会宣言をされる小松原副会長



▲採点とアドバイスは厳しく!!

第4回クリーン作戦 10月25日

ご家族や従業員の方々も含め、72名が参加しました。



▲早朝よりカモイモータープールに集合



▲作戦指示を出す大山会長



▲倉敷駅周辺がすっかりきれいになりました▶



▲俵田中商会様には、いつもお世話になります

3YEG合同例会(玉島YEG主管) 7月15日

7月15日(火) 3YEG合同例会が玉島YEG主幹により良寛荘で開催され、倉敷YEGより大山会長はじめ22名が参加しました。



▲県青連 渡辺会長挨拶



▲大山会長挨拶



▲懇親を深める3YEGメンバー



▲玉島YEG 中藤会長挨拶



▲アームレスリングで倉敷YEG、優勝!!

倉敷天領まつり バザー出店 7月26日

バザーの収益金は全額、岡山国体準備委員会へ寄付いたしました。



▲かき氷やお団子が飛ぶように売れました



▲バザー商品は早々と売れました



▲アイビスクエアで楽しく打ち上げ

倉敷小町コンテスト 7月26日

一次、二次、最終審査に審査員として延べ5名が協力しました。



▲審査を待つ候補者達



▲認定証を手渡す大山会長

今、想う事

投稿募集中!

今、あなたが想っている事 感動した事何でも結構です。お気軽に事務局までメールにて投稿下さい。

障害って何? 障害者は誰? 鴨井 尚志/直前会長

少し前の話になり恐縮ですが、今年の夏の高校野球は、どこの学校が優勝したか皆さんご記憶でしょうか? 地元代表・倉敷工業高校の健闘も、大いに光るものがありましたけれど、結果は茨城県代表・常総学院高校の優勝で幕を閉じました。毎年数々のドラマを展開し、多くの感動を与えてくれる高校野球。今年は、中でも今治西高校の三塁手・曾我健太君には驚かされました。既に多くの新聞やテレビで紹介されていますので、皆さんもご存知と思いますが、彼は5歳のときに事故で左足ひざから下を失い、以後義足とともに人生を歩んでいます。世間では、ハンディを持つ人を「障害者」と呼びますが、果たして曾我君は障害者なのでしょうか? 彼は小学三年生から野球を始め、今治西高校野球部では、一年の秋からレギュラー選手の座を獲得しています。しかも三塁手という過酷な守備をこなし、打っては6番打者(地方大会ではチーム1の打率)、走っても50メートル6秒5の俊足という並みの選手以上の能力を持ち、それを遺憾なく発揮しています。そして彼の活躍は、五体満足な我々に色々な考えを思い巡らせてくれます。彼は、大好きな野球がしたい、甲子園に出たいという自分の目標に向かって、我々の想像を絶する努力をしたに違いありません。とかく周りの人間は、「障害を乗り越えて・・・」とか「義足でありながら・・・」とか、健常者の愚かな物差しで勝手にドラマを作ってしまうのですが、曾我君本人には全くそ

の主人公である意識はないようです。「障害者であるか否かは、他人が決めることではなく、自分が感じることです。与えられた条件で自分がどこまでやれるかは、障害者も健常者も同じだと思います」という彼の言葉には、自分のやってきたことに対する誇りと自信が漂っています。確かに左足がないという現実があったから今の曾我君があることは事実でしょう。しかし、自分で限界を決めてしまわない彼の気力と努力の前に、その事実はちっぽけな出来事に過ぎないのではないかと感じてしまいます。また、曾我君を取り巻く周囲の人達も彼を障害者として扱わないどころか、義足であることを障害と認めていないような気さえします。今治西高校野球部の監督は、曾我君のことを問われ「そういえば曾我は義足だった」と言っていますし、曾我君の父親も「健太が義足を着けるのは、我々が靴を履くのと一緒」と言っています。本人も周りの人も限界を決める必要がないと信じているからこそ、目標に邁進でき、達成もできるのだと思います。

振り返って我々はどうでしょう? 仕事のことで家庭のことで青年部の活動でも、できない理由を探しては自分で制約を作り、限界を決めていることがありませんか? あるいは、部下や周りの人を見ると「どうせあいつの能力は・・・」と勝手に思い込んでいませんか? 先人の言葉に「物事を終わらせるのは、事実ではなく、自分の意思である」というのがあります。まさにその通りで、努力に際限はありません。四肢の欠損や視力・聴力障害等を抱えて立派に生きている人は曾我君の他にもたくさんいます。本当の障害とは、見た目や肉体的能力ではなく、本人とそれに関わる人達のそれぞれの「心の姿勢」にあるのかもしれない。甲子園大会初日第一試合で桐生第一高校に負けた神港学園高校野球部北原監督の言葉を思い出します。「報われない努力は時としてあるが、無駄な努力は決してない」